
ふりむいて、王子様！

れいちえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふりむいて、王子様！

【Zコード】

N4157T

【作者名】

れいちゃん

【あらすじ】

名も無き魔法使いの女の子が住む森に、一人の青年が迷い込んできた。彼は何と王子様！ 惚れた魔女っ子が王子様の気持ちを振り向かせるべく暴挙の数々を繰り広げる！ 齊迫、誘拐、洗脳、暴動、破壊工作お手の物！ 唯一良識あるのは彼女の使い魔、黒猫一匹。世間知らずな二人が織りなす勘違いラブコメ、いざ行かん！

(注) これは以前「小説＆まんがコミックニティ」というサイトにてリレー小説に参加した際の物に、大きく加筆修正したものです。() 各回の原案担当者のお名前を前書きおよび後書きに併記しています。

記載無も場合はれいちゃんの担当分です)

第一話 「思ひはかりとまじょひ」（前書き）

他サイト様にて、二年ほど前に参加しましたリレー小説（未完のまま放置されています）を大きく加筆修正してお届けいたします。

第一話 原案・アグア・イスラ（水島 牡丹）様。

第一話 「思いはちやんと伝えましょ」

ある所に、魔法使いの女の子がいました。

その女の子には名前はありません。

ずっと魔法の森の奥に住んでおり、人とはあまり会いません。魔女の家には一匹の黒猫の使い魔、ピエトロがいるだけです。彼女の話し相手はこの黒猫一匹だけ。だけど寂しいなんて思うことがよく暮らしていました。

そんな彼女が住む森の奥に、ある日一人の青年が迷いこんできました。

森の奥に人が入つてくる時は決まって面倒事が起きることを何度も経験してきた彼女は、青年がさらに森の奥深く、自分と使い魔のお家のある所にまで入つてこないよう、森から上手に出られるようにそつと魔法で手助けをしてあげました。魔法のホウキに乗つて空から目印を落とし、木々の並びを変えます。青年が彼女の存在に気付いたりしないように注意して、自分で道を見つけていると思い込むように、知らず知らずのうちに森の外へと導きます。

「それにしても、どうしてこんな森の奥にまでやつてきたのかしら。狩人や木こりだつたらこの奥に入つてはいけないつてことくらい知つてるはずなのに」

それならこの青年は狩人や木こりではないはずです。狩人や木こりでないのなら、一体彼は何者なのでしょう？ 彼女の心にこの青年への興味がわきました。青年はきれいな顔立ちで、身に着けた衣服もとても上等な物に見えました。赤錆色の短めの髪も艶があつて

手入れされているようで、野暮つたさはありません。自然と匂い立つ優雅な雰囲気とそのミステリアスな彼の素性に、女の子の心は短い間に知らず知らずのうちにどんどん惹かれていきました。

日が暮れるよりも前に青年は森から出ることができました。森から出るやいなやきれいな顔立ちの青年は何人もの人々に取り囲まれ、ひかれてきた白馬に乗って帰っていきます。どうやら只者ではないようです。不思議に思った彼女は、その青年の後をそのまま魔法のホウキで追いかけました。追いかけていった彼女は青年が入つていった建物を見て正直驚きました。なんとそこはお城だったのです。

見事麗しい青年。
上等なお召し物。
取り巻きの人々。
毛並みの整つた白馬。
入つていったのはお城。

これらのことから導き出される答えはひとつ。

この青年は、この国の王子様。
そして彼女は、一つのことに気が付きました。青年に恋をしているのだ、と。

魔女である自分と、次期国王であつた青年。

何とも不釣り合いで、普通に考えれば諦めざるをえない身分の差。身分の差どころか、魔女は恐れの対象で、むしろ存在を疎まれるくらいのものです。普通なら叶わぬ恋と諦めるところです。

ですが彼女はれっきとした魔女。普通じゃありません。彼女は青年を自分のものにしたくなりました。なんとしても。彼女にとつて空気はあくまで吸つて吐くもので、読むものではありませんでした。

不可能だ、と言われたらむしろチャレンジしたくなる。そんな厄介な反骨精神を宿した女の子が一生懸命考えます。

「どうしたら良いんだろう?」

いっぱい考えて、彼女は一つの答えにたどり着きました。

* * * * *

数日後、魔女はその青年のところへ行くことにしました。魔法のホウキに跨つてお城に向かいます。高い壁なんて空からの攻撃に何の役にも立ちません。まんまと城内に侵入した女の子は、さらにお城の中でも警備の甘いところを見つけて忍び込みます。すごい手際です。そしてどこでこんなスキルを身に着けたのかと誰もが疑問に思うほど、とても素人とは思えない身のこなしでした。

そのまま誰かに見つかる事無く王子様のところに向いました。どこの部屋に王子様がいるのかなんて知りません。ですが恋の嗅覚に頼つて一直線に向います。お付きの黒猫ピエトロは、いつお城の人につつかつて叱られたりしないかと気が気でなかつたのですが、ラツキーなことに誰にも遭う事無く一つのお部屋にたどり着きました。扉を押しあけると、その先に広がる大きな部屋には大きな窓辺から外を見ている青年が一人いました。

整った顔立ち、上等な口調。そして短めながら艶のある赤錆色をした髪。

恋は本当に魔法です。ここは王子様のお部屋でした。

一発で田地を喰ぎ当たた不法侵入の女の子に対しても、王子様は丁寧に声をかけました。

「君は誰だい？」

彼女は思いついた、とてもいい考えを披露します。

懐に手を差し入れると何かを取り出し、にっこりと微笑み、恋する乙女の眼差しを王子様に向けて、胸の高まりを一生懸命に抑えながらゆづくと、一言一言聞き取りやすこうじて口にします。

「王子様、私の家に来て下され」

彼女は何の捻りもなくそう言いました。色んな小細工などしない。この想い、ストレートに包み隠さず伝えるべし。いつだって乱戦を制するのは戦力を集中した部隊による強行突破。

しかし、どう見てもこの場合大敗することが田に見えています。普通に戦死です。草葉の陰から後に続くものを見守ることになるのがオチです。

ところが王子様は喜んで直ぐに従いました。ミラクルが起きたように思えますがそうではありません。いうるのが当然でした。

なぜなら、魔女の手には鋭い、凶悪そうな刃物が握られていたのだから。

使い魔である黒猫が言いました。

「ご主人、魔女なんだから魔法を使おうよ。媚薬を作る時間なら十分にあつたじゃない」

「あら、ピエトロ。魔法を使うだなんてそれはフェアじゃないわ。魔法で従わせるなんて恋ではないもの」

「……ご主人、これも恋じゃないよ。分かってる?」

王子様は、魔女の女の子を前に、両手を挙げて震えています。

どう見ても彼女の行き着いた考えはただの脅迫。如何なる時代でもアウトな物。それを採用することは人間としてどうかと思われても仕方がありません。でもそれもすべてたつたの一言で片づけられます。

魔女だから。

彼女は、魔女なので殺人も人攫いも、特に気にしません。下手の考え方休むに似たり。結局何も考えていないに等しい彼女の行動を咎めるることは誰にもできません。

なぜなら彼女は魔女だから。

さあ、彼女の想いはちゃんと王子様に伝わるのでしょうか?

第一話 「思ひ出せない」と「想い出せない」（後書き）

原案：アグア・イスラ（水島 牡丹）様。

すべてはここから始まりました。何故か創作意欲がガンガン湧いたあの頃……

参加された皆様と音信不通になってしまったしばらく経ります。皆様今どこに行かれたのでしょうか。もしご覧になつていらっしゃつたり、連絡お願いします。

第一話 「前と周りをよく見ましょ！」

魔法使いの女の子は刃物を突きつけられた王子様みて、この作戦は成功だ、と直感しました。

人間は一定以上のストレス下に置かれた場合、それを共有する人間を肯定的に見る傾向があると言われます。また恐怖で支配された状況では、被害者は反抗するよりも加害者に対して協力、信頼、好意でもつて対応しようと無意識に心理が働くとも言われます。その相手がもし異性だったらなおのこと。

「王子の胸の高鳴りは、もしや恋？」的な発想が飛び出します。ある意味魔法な思考です。そう考えると、今魔力の一切を使っていないと言つのに王子様に魔法をかけつつあるこの女の子は、生糸の魔法使いです。

彼女はこう考えました。

王子様はこう思つてゐるに違ひない。

「一つ間違えよつものなら、柱に括られた自分の周りに香草の変わりにたくさんの薪を用意され、気が付いたならミディアム・レアーオにいしく焼かれてしまいかねないこの中世の雰囲気漂つむ城の中で、こんな形で脅迫を受けるとは思わなかつた。

いやむじり返答によつては Death or Die。

「Jの長い人生の中でも極限の一択。Jいつはなかなかに厳しいフラグだぜ。

だけど、Jの胸の高鳴りは……なに？

今までこんな風に人を見たことなんて無かった。

僕の前では誰もがいつも畏まつて、必ず一歩退いていた。
彼女は何て堂々としているのだろう。

僕に臆することもなく、僕の命を盗もうとしている。

だと呟つのに、そんな凶行をしていると感じさせない……

ああ、何てかわいらしい微笑みなんだ。

Jの人になら、一生をささげても構わない……

……と。

まさにお花畠。彼女の頭の中には一面の季節はずれな美しい花々が咲き誇っています。そしてそんなおめでたい彼女の後ろには、赤や黄色やピンクや白の花弁を持った数々の花々が花開いているのが見えてくるような気がします。本当に魔法な思考でした。

王子様の背中に出刃包丁を突きつけ、変なにやけ面を晒していた彼女をとは対照的に、王子様の顔は血の気が引いて言葉が出ない様子です。

魔女がかけた心理の魔法は今のところまだ十分に効果を示していません。

ませんでした。びくびくと怯えて歩く王子様は自分の部屋の机に蹴躡いてしました。同時に机の上の花瓶が落つこちて、がしゃーん！と大きな音を立てました。普段ならそんなミスをしない魔女の女の子も今は心ここに在らず。花瓶が割れたことにも気付いていません。

いくら争いがなく平和ボケした国とは言え、さすがにお城の衛兵達も侵入者の痕跡に気付き、城内のあちこちで賊の搜索を始めていました。大きな音が立つた王子様のお部屋に一人の衛兵さんが慌てた様子で入ってきました。そしてその現場を目撃します。大きな声を出して集合を呼び掛けます。わらわらと城中の兵隊さんが、王子様の大きな部屋いっぱいになるくらい駆けつけました。

大の大人が、まだまだ子供にしか見えない女の子相手に鎧を着込んで、出刃包丁なんかよりもはるかに大きくて鋭い、人を殺すための道具を突きつけます。

殺されそうになつた女の子が否応なしに人質を取つた構図でした。
……しうなつた経緯いきさつを知らなければ。

お花畠の中心に立つたにやけ面の魔女は自分の周囲に全然気付いていません。大ピンチです。まだ心理の魔法がかかる前だつた王子様はほつと、安心した顔を浮かべています。

突然衛兵達が吹き飛びました。皆が振り返り驚きます。

そこには人よりも大きな姿をした豹のような生き物が居たのです。
そして、

「……主人に何を向けている？ 下がれ、下郎が」

何とそれは人の言葉を発したのです。

第二話 「人と見比べてはいけません」

「下がれ、下郎が」

人の言葉を発したそれ的眼光は鋭く、衛兵は全員ちびりそうになりました。

そもそものはず、彼らは衛兵で日々訓練をしてはいますが、戦争や騒乱を経験したことはありませんし、お城は威厳漂う姿ですからテ口を起こそうなんて大それたことを考えるような輩やからが現れることも一切無かつたのです。こんなモンスターがいきなり本陣に現れただなんて、想像すらしたことがありませんでした。

モンスターの出現は想定の範囲外だったのは仕方ないとしても、危機意識が十分でなかつたことは反省すべき点でしょう。

そして災厄はいつも突然に襲いかかります。

緩んだ危機意識をすり抜けて突如現れた国を揺るがしかねない災厄（現在にやけ面の女の子）が歩き出しました。まだ周囲の状況に気付いていません。王子様の背中を出刃包丁で突つつきながら歩いていきます。彼女を守るために黒い巨獸ヒューマンがそばに控えて周囲に睨みを利かせ、足音静かに進みます。

「……ご主人、いい加減にこっちの世界に戻つてきてくださいにや」

この場に居たのはお城の関係者を除けば、魔法使いの女の子と黒猫一匹だけのはずでした。今は女の子一人と黒豹が一頭。黒い小さな猫はどこにもいません。恐ろしい魔獸の姿をしているのに語尾がかわいいそれは、尻尾で魔女の頭をなでなでしました。それにも全然気付きません。

「ああ、どうしてボクはこんなダメダメ魔女の使い魔になってしまったのかにゃ」

じゅやうの黒豹がピエトロのようです。本当の力を発揮する時にほのよつた魔獸に変化するのでしょうか。とても偉大でしなやか、その姿に畏敬を覚えます。がしかし、さつきの台詞は決して口にしません。あくまで心の叫びです。したらネコ鍋にされてしまうからです。

ピエトロが恐れるネコ鍋。それはネコたちが鍋をベッド代わりにして、丸まつて眠っているような可愛い姿を指し示した比喩法ではなく、ちゃんとした鍋料理。作られる調理場を表現できません。その画は全面モザイクで自己規制をさせていただきたいと思います。ネコたん、ネコたん。ニヤーニヤー、おいでおいで。ペロペロしてくれるの~。癒される~。そんなかわいいおネコ様に何て事を! そこに直れ、肅清してくれる! おっど。

へらへらしたまま魔女は青い顔をした王子様を連れて部屋から出て行きました。兵隊達への警戒は変身したピエトロが怠りません。誰も近づけませんでした。

魔女の野望へ一步ずつ前進中です。

その一步は人間にとつて小さな一步でした。
しかし彼女にとつて人生を左右する、大きな一步でもありました。

「はは、アンタかい？ うちの王子をさらって行くなんてバカやらかしてんのは」

誰もが近づかない、いえ近づけない王子と魔女と魔物のパーティの前に立ちはだかる勇者が颯爽と現れました。

「あ、アルファーネ！！」

王子様の声を聞いて、魔女はようやくコッチの世界に戻つてきました。

そして俄かに不機嫌に眉を顰めました。

アルファーネと呼ばれた人物を見たからです。

その人物は長いストレートヘヤーをして、小顔で鼻筋がすっと通り、眉は細く整えられ、少し切れ長の二重の目が見る人の心を奪つ、万人の目を惹くようなすらつとした美人。

それもないすばでいいでした。

一方の魔女の女の子は短めのくせつ毛で童顔、その両目は大きく愛らしく、黙つてさえいればかわいらしいのですが、今は性根を映したかのようにたいそう歪んでいます。そしてローブの下に隠していますが、お顔の見た目通りに体型もまだまだ幼い今までつるべたな感じでした。大丈夫、諦めないで！ まだ余地はあるよ！

自分にはないその特徴を一瞬で見抜いた彼女は、改めて王子様を見ます。

王子様のこれほどにない開放感と期待に満ちた顔を見て、王子様の笑顔を受ける女人に向て顔を怒りにまかせてさらに歪めます。

とてもとても怖くて、それを見たピエトロは巨大な豹からかわい子猫に戻ってしまいました。

第四話 「危ない物はしまいなれ」（前書き）

第四話・原案 アグア・イスラ（水島牡丹）様

第四話 「危ない物はしまいなれ」

突如現れた美女に、魔法使いの女の子の怒りは頂点に達したようです。

王子様の視線を受け止める女は私一人でいいわ、と魔女は思いました。ずっと一緒にいるピエトロには魔女がそう考へていると直ぐに分かりました。

うわ。『主人の目、殺意満点だよ！

そう気付いてピエトロが美女に対して注意を促そうとしたまさにその時、

「王子は、『の私が守』」

素手のままの美女が台詞を言い終え構えを取る前に魔女が飛び出しました。

順手に持っていた出刃包丁はいつの間にか逆手に持ち変えられていて、右フックを打ち出すように美女の喉元に襲いかかります。

美女は紙一重でその刃を躊躇したのですが、さらに踏み込んできた魔女は逆手に持ったまま出刃包丁で突きを繰り出します。

美女はとっさに右手で出刃包丁を払つて右足で蹴りこみましたが、小柄な魔女はそのまま美女の脇をすり抜けるようにして避けました。背後に回り込んで美女の背中、肺の辺りに向けて再び出刃包丁を突き刺しました。しかしその刃は空を切り、次の瞬間には魔女はバランスを崩してしりもちをついていました。包丁が刺さる前に美女が素早くしゃがみこんで後ろに向かつて下段回し蹴りを放っていたのです。

右手をついて体を起こそうとしていた魔女に向かって、立ち上がりつた美女が渾身の力を込めた正拳を振り下ろします。

長くしなやかな肢体で行われた一連の舞うような動きに周囲の衛兵達の目は釘づけでした。勝利を確信した下段突き。ですが、その後歓声は呑みこまれ、静寂が広がりました。

美女のお腹からぼたぼたと、フレッシュな血が地面へと流れます。

「ちくしょう…… いつの間に持ち替えたの…… よ……」

魔女の左手に順手で持たれた出刃包丁が美女の細くくびれたウエストに飲み込まれています。赤く染まつた刀身が引き抜かれると、美女の膝が崩れ落ち、刺されたところを押さえたまま床に倒れ伏しました。だんだんと赤い池が広がっていきます。

その光景を見て魔女は言います。

「これぞ、恋というもののね。恋敵と戦うのも青春だわッ！」

「……ご主人、この場合『戦う』の定義が全く違うよ。分かってる？」

「あら、ピエトロ。戦いというのは、何時だって血生臭いものなのよ」

実際に『戦闘』しなくていい、と声を大にして言いたい。恋を勝ち取ると言つのはそりがちのことではない、お前は何と戦っているんだ、と。

自分の過ちに気付かないどころか、その結果に対しても満足気な主人に、使い魔のピエトロが責ざめます。

王子様も真っ青になつて、がたがたと震えながら呟きました。

「あ、アルファーネ……」

絶望の眩きです。

魔女は、先程の王子様のアルファーネへの期待混じりの響きとは、全く違つたこの響きに満足しました。

これで王子様に頼られる存在は、自分以外無くなつた。

歪んだ達成感に満たされた魔女は、つい今先ほど何が起きたのか全く知らない人が見たら、釣られて笑顔になつてしまつほど、とても明るくかわいらしい笑顔を浮かべていました。

魔女と王子様と黒猫が行進を始めました。もう王子と魔女と使い魔のパーティを止めるものはおりません。

魔女のスケジュールとしては、あとは帰宅して愛を語り合い、そしてラブラブでうへへな生活が待つだけです。しかしこれを誘拐と呼びます。犯罪です。とても認められるような事ではありません。

それに王子様には、魔女を受け入れるスペースはありません。もう全面的に拒否の構えです。何故自分に刃物を向けているかも分かりません。

他国の暗殺者だったら、こんなに回りくどいことをせずにもうすでに命を奪つてゐるに違ひない。ならばこの女の子は新手のテロリストなのかもしれない、なんて王子様は考へています。恐怖で人心を支配しようとするテロリズムに對して屈してしまうことに忸怩たる思いすら抱いてゐるかもしれません。

この凶刃の前に倒れた、自分を守るために戦つた存在のためにも、この犯人を何とか捕まえなくては、と王子様は心に誓いました。

こんな状況で魔女の思惑通りに進むのでしょうか。

第四話 「危ない物はしまいなれ」（後書き）

原案：アグア・イスラ（水島 牡丹）様

第五話 「話は最後まで聞くべきです」（前書き）

第五話 原案・しい様

第五話 「話は最後まで聞くべきです」

「ね、ねえ、君はびうじて…… ほ、僕を連れ去らうとしてるんだい？」

田の前に倒れて虫の息のアルファーネを見下ろして恐ろしい笑いを浮かべている女の子に、王子は勇気を振り絞って、今まで一番気になっていたことを尋ねました。何かこの女の子の正体につながるヒントを得られるかもしれません。ですが冷静に考えれば何か明確な信念、意図を持ったプロのテロリストであれば、こんなところでそんな情報を漏えいすることなんてないと分かります。その目的を知る時、それは王子様の命が奪われた時にほかなりません。

「あら、そうでしたわね。私ったら、まだ何もあなたに教えてませんでしたわね！」

王子に話しかけられた魔女は、倒れているアルファーネに向けていた表情を〇コントマ一秒钟で変え、瞬時にバラ色に染まつた顔を王子に向けました。

「この変貌、いつもよつよつぽど魔法」
「何か言つたかしら？」「口アヒトロ」
「……いえ何も」

ぐるぐると変わる彼女の表情を見た王子様は、彼女に言われる前に、ハツと氣きました。

「急に、こんなに真っ赤になつて…… 何なんだ……？」
「ま、まさかこの子…… もしかして…… 自分に……」

途端に、青ざめていた顔が真っ白に変わりました。この上ない恐怖をまた感じたのです。

僕に何か恨みを持っているのかもしれない！

……かわいそうに、普段全く不自由のない生活をしていた王子様は、緊急事態に勘が働きませんでした。彼は彼女の赤面を自分に対する激しい怒りだと判断してしまったのです。表情を読む能力に欠けていました。

しかし魔女は、そんな王子様の考えを知る由も無く。ピヒトロに睨みをきかした後、再び王子様にバラ色の顔を向けています。

「私はあなたを一目見た時からとつてもとつても
「ま、待ってくれ！ なんだか良くな分からなが、本当に悪かつた
！」

王子様は、突然頭を下げました。謝ればなんとかなると思つたのです。そんな王子様の行動が意味するところが魔女には全く分かりません。

私は王子様に恋してしまったから、王子様を私のものにしたいだけなんだけどなあ……。

面と向かつて伝えようとしたのに腰を折られてしまった彼女はいささか不満氣味でした。でもそんなことは些細な事。まずは王子様をゲットです。ゲットして邪魔が入らないところで改めて伝えましょ。ふう、と小さくため息をついて心を落ち着けたところで小猫

モードのピエトロが足元に寄つて来て、『主人のふくらはざわのあたりに小さな前足の柔らかい肉球でぽん、ヒタツチしました。

「ほらね、『主人様。やつぱりこんなやり方、よくなかつたんだよ。今は従わせるだけだからどうにかなるだらうけど、いざ自分のものにしたとしても心が着いてきてくれなかつたら厄介なことになりそうだよ。」

「あら、ピエトロ。言つたでしょ。恋は恋。私のものになれば、もう私たちはHappy Endよ。」

「王子は違う意味でEndになりそなうなんだけど……」

「何よそれ。まずは邪魔が入らないよう私の家に連れて行けばオッケーなのよ！ 一緒にいることから始まる愛をゆっくり育てたらいじやない！」

魔女はピエトロの言つていることを全く分かつていよいよです。ストックホルム症候群という言葉を調べた方が良いのではないのでしょうか。この場合愛が育つたように錯覚しても、いずれ王子様が正気に戻つてしまつた時、それまでの好意が一気に憎悪となつて反転します。長期的予後で考えると不良です。

「さあ王子様、早く私の家に向かいましょう」

「や、そんなん！ ほ、僕が何をしたつて……」

王子様は謝つても全く効き田の無かつたことにショックを受けました。そりやそうです。大切な言葉を遮つただけじゃなく、さらりと出てきた超重要キーワードを右から左に受け流してしまつような思考形態では生き残れません。自分は魔女の家でいつたいどんな復讐を受けるのだろうと、間違つた被害者妄想にただただおびえていました。

「何をしていいの、ピート。あなたもわざと恭へのよ」

「……ご主人、ちゃんとやり直そつよ。その方が」

「アルファーネ、とつてもかわいそつね（棒読み）」

「行きます。すぐに行きます」

城内一の腕利きの戦士が倒されたことで士氣を完全に折られた衛兵さん達の中に、この暴挙を止めに一歩踏み出すことができる人はいませんでした。見事麗しい青年と若干幼く見える女の子と喋る黒猫の奇妙な一行は、とうとうお城の門をくぐりて出てこつてしまいました。

……ペジ。

「あ、あの雌豚……王子は……私の……」

だんだんうつむになつてゆく意識の中、遠くなつて行く女の子の後ろ姿をしつかり目に焼き付け、王室に繋がる無線を右手に、倒れ伏した美女は最後の力を振り絞ります。

「！」……「いらっしゃるアルファーネ……。何者かが、王子を拉致し……城下へ連れ去って……」

……最後まで言い切ることはできませんでした。

第五話 「話は最後まで聞くべきです」（後書き）

第五話 原案・しい様

これがラブコメ……だと……？ なんだか甘々でもなくじれじれでもなく、ただ暴挙に出ているだけの気がするのは自分だけではないな……

第六話 「お夕い夕前で呼びましょう」（前書き）

第六話 原案：前半 桜雪 木乃（八束）様&後半 アグア・イス
ラ（水島 牡丹）様

第六話 「お互に名前で呼びましょう」

ところ変わつて魔女一行。

剣呑な雰囲気につつまれつつあるお城のことはいざしらず、いまだにガクガクブルブルと震えている王子様と、相も変わらず頭の中がお花畠状態の彼女と、彼女に逆らえないピエトロは城からすこし離れた場所を歩いていました。血糊の残つた出刃包丁はいまだ彼女の手にあります。

王子様から見たら誘拐。しかし魔女の意見としては本人の同意の上で、です。犯罪に手を染めた人間が自分に都合のいいように事実の解釈をするのはいつの世でも、どの場所でも同じなのでしょうか。

ここにこく笑顔の彼女はとても満足そうだったのですが、さすがに無言のままではつまらなくなってきたのでしょうか。それにお互い言葉を交わしたのはさつきが初めてで、お互いのことを何も知りません。お家に着いてからいろいろと深く知り合えば良いと思つていたのですが、一人乗りの魔法のホウキでお城にやつてきたのとは異なり帰りは徒步。時間がかかります。

変化したピエトロに乗ればいいのに、と思われるのですが、乗り心地が良くないと言つことで却下されました。お城まで乗つてやつてきた魔法のホウキは、ピエトロが前足で抱えて、後ろ足で立ち上がりつてテコテコとついてきます。

何から聞こうかと考えていた魔女が口を開きました。

「ねえ王子様、王子様はなんて名前なの？」

「ぼ、僕、の……？」

そう、お互いを知りあうにはまず名前から。きらきらと瞳を輝か

せて、魔女は問います。一見とてもかわいらしい。ですが手には常に刃物、ピエトロはそれから怯えるように視線をすらしているのですが、城のある方へ常に意識を向けています。主人を守るための使い魔として警戒を怠りません。

王子様は答えるしかない、と震える口を精一杯動かそうとしますが、そのぎらぎらと光る刃物が、と言つよりもそれを扱つて人を目の前で殺めた女の子の姿が脳裏によぎり、怖くてうまく答えられません。それでも頑張つていいました。

「僕のな、なま……」

「そう、わかつたわ！」

ぱん、と手をつって、彼女は勝手に話をすすめています。どうやらこの魔女特有の恋回路で王子の名前の結論がでたようです。本人の意志などこの際無視らしいです。知り合つ氣、分かり合つ氣は無いのでしょうか。

「クリストファー・ルパート・ウイングミア・ウラジミール・カーラ・アレクサンダー・フランソワレジアルド・ランスロットハーマン・グレゴリー！ 素敵！ 私が恋した王子様ぴったりの気品あふれるお名前！ そうねえ、でも長いからどう呼ぼうかしら……？」

どうして自分のところに魔女がやってきたのか、答えとなる超重要キーワードが今回も含まれていましたが、勝手な妄想で人の名前を作り上げた魔女のある意味マジカルな思考回路にあっけにとられてしまった王子様は聞き逃していました。本当に不運です。

タイミングを逃すのは「える」側にも受け取る側にも、両方ともに問題があるので、と言つことがよくわかる瞬間でした。

……少なくとも、ピエトロはそう理解しました。

（さういりと田を輝かせたあと、魔女が（自分が勝手に名前を想像した）王子様をどのように呼ばつかと考え込み始めると、今まで黙っていたピエトロが低い唸り声を上げました。

「（）主人、なにかがいる……！」

ピエトロの何かがいるという言葉に魔女の目つきは鋭くなりました。出刃包丁をしまい、ゆつたりと余裕のある黒のローブの袖に手を突っこみ、中から取り出した物をピエトロが唸り声をあげた方向に向けて投げました。

「着火つ！」

すると、魔女が投げたものが大爆発しました。そう、爆弾です。茂みから爆風に飛ばされたモノが無残な姿となつてぼとりと地に落ちました。

「あら、敵かと思ったら、ただの動物だつたわ」「ご主人、だからせめて魔法を使おうよ。魔女なんだからさ」「あら、ピエトロ。せめて、ただの人間や動物にもチャンスを『与えなきや」

魔女はチャンスを『与えます』が、決して反撃は許しません。
「チャンスを『与えてもこれは意味ないよ、ご主人』
ピエトロは自分の主人と遭遇してしまつた悲劇を憐れみながら、
軀を晒す生き物だつたものに近づいていきます。

「あら、ピエトロ、ただの動物と思ったら、子猫だつたわ。可哀相」「ギヤああああああああああああああああああああああああああああつ！」

魔女は決して、反撃を許しませんでした。ちくしょつ……！　子猫を……つ　世界の輝きを……つ

王子様はただただ、震えています。

結局追手や救援は来ません。そして「魔女の冷酷な面を一度も目にした王子様は覚悟しました。」この悪漢を下手に刺激してはいけない、自分が助かるにはまず従順であるべきだと。

そしてそのためにはまずこの魔女の名前を知り、お互に名前を呼んで親しくあることを望んでいるとアピールするべきだと。

……謀らずしも彼女の思惑通りです。ストックホルム症候群一直線の思考です。

「さ、君の名前は何と言つんだい？」

「あら、王子様、私に名前はありませんの。王子様が付けて下さいな」

魔女の手にはまた、凶悪な刃物が握られています。

「……み、ミザリーとか」

ピエトロが仰天しました。

不幸、という意味です。今の王子様にとつてまさに相応しいネーミングと言えるでしょう。

しかし状況が状況です。何と言つ事でしょう、王子様も空気が読めない。KYです。ピエトロは王子様の死を覚悟しました。

「あら、きれいな響きの名前ですわね」

ピエトロは目ン玉をひん剥きました。やんわりと主人に即決させないようにつなぎます。

「1」「2」主人、王子は『とか』、つて言つたよ。他の候補も聞いてみようよ

ミザリーに決めてからその意味を知つたら怖そうです。

「あらやつ」

ピエトロの会心の一撃でした。今そこににある危機を回避できました。王子様は別の名前を考えます。

「ジョンソン」

「それ男の名前じゃなくて？」

「というより、殺人鬼の名前で有名です。

「じゃ、じゃあ、フレディ」

「何だか、フレンドリーな名前ね、私には合わないわ
そういうことではない気がします。悪夢の中で追われ続けたいの
でしょうか。

「なら、アリス」

「アリスッ！ 素敵な名前ね。気に入ったわ。ビーブ、ピートロ」

「まあ、……それなり」

田を逸らしながら、ピートロは妥協しました。

「アリス、きっと私みたいにお淑やかで可愛い女子に付けられる
名前よ」

「……」

ピートロは黙りました。名前のイメージとしては確かにそうかも
しれませんが、『主人には…… などと言つたらネ』鍋です。

「ぎやかに、のぎやかに、仮初の平穏を楽しみながら一人と一匹
は森の中に入つていきました。魔女のお家はもつと奥の方です。魔
女にとつてはこの森は自然にあふれて豊かな環境で静かに愛を育む
天国に映りますが、王子様にとつては陽の光が届かない、深い地獄
への入り口が口を開けて待つていて見えていた事でしょう。

その両方を傍から見ていた小さな黒猫は、魔法のホウキを抱えた
まま、はあ、と小さくため息をつきました。

その頃、所変わつて、お城。

凶刃に倒れた美女からの通信を聞いた王さまは、こんな事を言つていました。

「今日、何者かに王子がさらわれた！ 王子を保護した者に報奨金二億、女性であれば王子と結婚する権利を『』える！ 一刻も早く王子を連れ戻すのだつ」

王子様本人の意思そつちのまま、目の前に褒美を吊り下げられた馬車馬のように、玉の輿を狙つ国中の美女たちが王子を探すことになりました。

第六話 「お夕い夕前で呼びましょう」（後書き）

第六話 原案：前半 桜雪 木乃（八束）様&後半
ラ（水島 牡丹）様 アグア・イス

第七話 「やさしい人が一番です」

まるでやわらかく包み込んで、このままでは飼い殺しにされてしまいそうな環境で育てられてきた王子様。世間や一般市民から見れば何不自由なく、何の苦痛もなく、レールに沿って歩んでいけば得意された順風満帆の未来が間違いなく手に入る。しかし彼だって人の子。王子様も王族であり、後継者であると言つその運命の中いろいろいろと考えるところがありました。どう思い、どう生きていくかに悩む王子様。ですがそれはまた別のお話。

しかしどしても環境は人の性質に大きく影響を与えます。逆境、苦境に曝され続けた人間は、常に現状を切り開くため苦しい現実のわずかな隙間を見出そうとします。良い言い方であれば、諦めない、ハングリー精神の高い人。悪く言えば疑い深く、猜疑心の強い人であるでしょう。常に満ち足り、信頼できる人達に囲まれていた人は、良く言えば寛大で包容力があり、悪意を込めて言えば騙されやすい甘ちゃんになる。

……「Jさんは個人的な意見ですので「それは違う!」とおっしゃる場合は、そつと囁いていただか、華麗にスルーしてください。

文武に優秀で生まれに恵まれ、そしてその環境を無意識のもとで享受してきた王子様は、彼自身の奥底に持つ物が実は……と言うことどうしても、基本的性質はK.Y.。経験不足から来るものだとは思うのですが、拉致されてきた今現在ではそれは致命的なことでした。王子様がK.Y.だなんて思いもしない魔女は、誰が見ても彼女の頭の上にたくさんの「マークが浮いているとわかるほど上機嫌に

なっていました。

「アリス アリス 私はアリス」

「ミミヨーなメロディーに乗せて、初めて認めた自分の名前を繰り返していました。

名前が無くて魔女が困ったことはありません。なぜなら彼女はずっと、孤児の彼女を拾つたお師匠との一人暮らしだったからです。それにピートロも初めから彼女のことを「ご主人」と呼んでいます。いつの間にか魔法使い（色々な意味で）のお師匠と暮らしていました。それまでの記憶はなく、彼女はこのお師匠の暮らし方や考え方、魔法の使い方を見て覚えてきました。お師匠はたくさんの魔法を使い、たくさんの魔法の薬を作り、たくさん悪いことを考え、気まぐれに人助けをしてきました。それをずっと見てきた女の子はお師匠と一緒にいた十年ちょっとの間でたくさんのことを学び、自分で生きる力をつけていきました。

「小娘
「お前」

十年以上も一緒に暮らしてきたのに彼女をそう呼ぶお師匠しか知りませんし、それを「ごく普通」と思っていたので、名前で呼ばれなくともへーとも思わなかつたのです。というか、名前という言葉も知りませんでした。

しかし、ある時変わりました。

「おい、小娘。子猫を拾つてきたぞ。これからはこいつを使い魔として鍛えるんだ」

そう言つてお師匠は愛媛みかんの段ボール箱に無造作に入れられてモゾモゾしている黒い生き物を彼女に押し付けました。

目が開いていましたが、いまだ小さく生後一ヶ月も経つていなさうな黒い子猫。お母さんネコと一緒にれば「飯も満足に得られないで、自分で生きていく術に欠ける小さな命。

どうしてこんな状態で捨ててしまうのでしょうか。段ボール箱に入つていたと言うことはまず間違いなく人間の傍にいたはずです。殺すことを十分に理解した上での遺棄。拾つてくれる人がいるに違いないという甘え。育ててくれる人を探すと言つ努力を放棄して、自分と同じ種族でないから構わないという実に見事な身勝手さを示してくださいました。

……お師匠と魔女見習いの女の子がそんなことを考えたはずもありませんが、とりあえず言われたように女の子は子猫を受け取りました。

押し付けられたは良いものの、世話の仕方なんて知りません。適当に牛乳をスプーンですくつて飲ませてみたり、とりあえず冷たくなつてきたので抱っこして暖めてみたりしてみましたが、甲斐なくどんどん弱つていきました。

もともと元気いっぉいで余力に漲つていたわけではありませんから仕方がないかもしませんが、受け取つてほんの数日の間に子猫は動けなくなつてしましました。さすがに不味いと思つた女の子はお師匠に相談します。

「お師匠。子猫があんまり動きません」

「それならこれを飲ませたまえ」

なにやらアヤシげな瓶を手渡しました。なみなみと入つた螢光紫

の液体。

どうみても、毒です。

女の子も「なんぞこれ」と思いましたが、自分は何も知らないので頼ることができるのはお師匠だけです。言われたとおりにその口に流し始めました。途端に子猫はピクピクし始め、動かなくなりました。やっぱり毒だつたのです。

止めを刺してしまいました。

「よし、上出来だ」

殺してしまつて誉められました。彼女も別に後悔したり泣き崩れたりするわけでもなく、「あらー」とただその現実を受け止めていました。なんてことでしょう。彼女は他人に容赦をしない人生を歩むことに抵抗を感じなくなつてしまっていたのです。

全部このクソオヤジのせいでした。

にやにやしながらお師匠は子猫の亡骸を取り上げ、魔法陣の書かれた床の上に小さな亡骸を置きました。ブツブツ呪文を唱えると魔法陣からボワボワと煙が立ち始め、その煙が子猫の鼻や口に吸い込まれていきました。

煙が全部なくなると、子猫が再び動き始めました。

女の子もびっくりです。びっくりして子猫を再び抱き上げました。

「おや？ あなたが助けてくれたんですね？」

もつとびつです。

「よし、成功だ。これでただの子猫は魔物としてよみがえったぞ」

全部お師匠の作戦通りでした。どうせ巧く世話の出来ない女の子の手で瀕死にまで追い込んだあと、魔法のクスリと儀式で使い魔に作り変えたのでした。なんといつ策士。

「子猫よ、貴様の名前はピエトロだ」

「名前？ 名前とは何ですかお師匠」

「そんなことも知らんのか」

知るわけありません。女の子が唯一知っている他人はお師匠しか居ないのである。

「名前とはそれを区別するために特別につけた言葉のことだ」

「それじゃ、私の名前はなんですか」

「じらん。何でもええやろ」

力チンと来ました。

ネコには名前をソシッコーで付けたくせに、女の子には名前を尋ねることも、つけようとする素振りも見せたことはありません。

つていうか何で関西弁やねん。

ピエトロと名付けられた黒い子猫を女の子にもう一度押し付け、魔法の本とか道具とか薬の材料がいっぱい置かれた部屋に戻つていつたお師匠の後ろ姿を、魔法使い見習いの女の子は苛立ちを隠すとの無いとても怖い顔つきで睨んでいました。

その晩ピエトロはおねしょしないようにトイレに起きました。まだ小さいのとお行儀のよい子でした。月明かり差し込むお部屋に入ると、異変に気づきました。まだ嗅いだことがないにおりがします。ですがいざれ飽きたほど経験し、何とも思わなくなるにおいだと本能が教えます。

においの出所はどこだろ？、と黒い子猫は闇に溶けながら探します。わずかな月明かりにその小さな黄色の目が光り、暗闇の中に小さな宝石が浮かんでいるように見えました。

大きい何かが床の上に転がっています。月明かり程度でも昼間と遜色なく見ることができるピエトロは、転がっている何かの周りを足音立てるごとなく歩き、それをよく観察しました。

……女の子のお師匠です。

お師匠が一階の床で冷たくなっていました。背中には深々と出刃包丁が突き刺さっていました。お師匠の周りには黒っぽい水たまりができます。

せつとき氣付いたにおい、それは血の香り。

何かの事件性を感じ取ったピエトロは、子猫とは思えぬ機敏な動きで壁を背にして後足で立ち上りました。ひげをピクピクさせて

周囲に気を配ります。その時、気付きました。

窓辺に誰か居ます。

窓から円を眺めているのは、自分を抱き上げてくれた女の子でした。

頬杖を着くその手は紅く染まっています。

その姿はとても恐ろしかったのですが、ピエトロは魅入ってしまいました。

ピエトロはひざまづき、頭を深く垂れ、服従の意を示します。

「我が主よ…… 我は今ここに誓います。そなたを主人と呼び、付き従うことをする

名も無き女の子と、その使い魔の出会いは、とても血生臭いものでした。

第七話 「やさしい人が一番です」（後書き）

おネコ様への「ラブ」ばかりが出ています（汗）
キーワードの「ラブコメ」の「ラブ」は「作者 ピエトロ（猫）」
ですか（大汗）

ここから先、もつとちゃんと「ラブコメ要素が出せるといいなあ

第八話 「掃除は」まめにやつまじょひ」（前書き）

原案・アグア・イスラ（水島牡丹）様

第八話 「掃除は」まめにやつまじょ」

魔女の家に着きました。ピエトロと魔女アリスと王子様の三人です。王子様はそのＫＹつぶりを發揮したもの、何とか生きて目的地にたどり着くことができました。

魔女のお家があるのは森の奥深く。ですがそのお家の周りは木々が切り拓かれて田当たりも良く、草花が咲き小鳥も舞っています。おどりおどりしく、ギャアギャアとけたたましく獣や鳥の鳴き声が響くような一般的なイメージとは違っていました。それだけでも王子様はほっと一息です。

森の入り口をまるで地獄の一丁田のように感じたことを、ちょっと悪いな、とも思っていました。確かにここは空氣も新鮮で、湿気がひどすぎるのも、また逆に乾ききっているのもなく、本当に自然にあふれる豊かな森。

こんな素敵な環境でどうしてこんな……環境で悪になった?
違うね！ こいつは生まれついての ウオッホン！ オホン！ オホーーン！ えーっと。

王子様は、初めての民家、初めての庶民風の家、初めての平民の家へのお泊りです。王子様は戸惑っていました。何とかこの誘拐犯とフレンドリーな関係を築こうと、ストックホルム症候群的な思考のもと、好意的に受け入れる努力を始めています。

見る物触る物すべてが新鮮でした。なんだかんだで普段と違う物に対する好奇心は抑えがたく、結構すんなり受け入れられたみたいで。ですがここは魔女のお家。あらゆるものがスタンダードから

かけ離れていると言つてもいいでしょ。のっけからハードルが高くてすみません。

恐怖心は拭い去れていませんでしたが、上機嫌な魔女アリスの姿に少々安心しているようでした。

そして一つの事に気付きました。

「 そりが、民たちの家とは、こついう変わった匂いがするものなんだな」

王子様、また、変なことを言い出しました。いや、確かに人の家の匂いは気になります。でもそれは開口一番にするものじゃありません。時にはその一言を不快に思う人だつているんです。

フオローするよつにピエトロが答えます。

「普通の家ではこんな怪しい匂いはしないからね、王子様。うちだけの、”特有”の匂いだから」

ピエトロが前足で指し示した方には、火にかけられた鍋がありました。弱火でクツクツと煮たてられ、グプグプとねばっこい泡が立つています。見るからに毒々しい。吐瀉物以下の匂いがブンブンするぜ。色も真っ黒になつたその中身が何か、それはずっとここに住んでいた、ピエトロにさえも分かりません。

「あら、王子様。それ、一年は前から煮ている煮物の匂いよ。食べます?」

「 こりと魔女アリスは笑つて、オタマで一年前以上も経つ超熟成煮物を、平然と搔き混ぜました。今の精神状況だと王子様はまず間違ひなく、「はい」と言つてしまひます。慌ててピエトロが王子

様を制し、魔女に進言します。

「「」主人、王子を一瞬で亡き者にしたくないなら食べさせない方がいいですね」

「や、そうね、さすがに冗談が過ぎたかしら」

さすがに食べる物じゃない、ところの常識があつたよつて、ピートロも安心しました。ですが。

「ああ、ピートロ、あなたの「」飯か」

器に盛られた真っ黒な超熟成煮物を出され、ピートロは視線を逸らしました。しかし「」のままだとまず間違いなく口の中に強制的に流し込まれてしまつ事でしょ？慌てて、ひそひそと話題を変更します。

「「」、「」主人、せめて掃除をしよつよ。王子様のことが好きなんでしょう？ 好きな男の前でいくらなんでもこれは、酷いよ。こんな泥棒が来た後みたいな惨状は」

見渡す限り、「」の山。足の踏み場もありません。

「それもそうね。あなたのキャットフードも一年前から消えたまま」

見つかつたところで絶対、賞味期限切れです。

魔女は王子様に快適な生活を送つてもう為、掃除を始めました。もちろん、魔法は使いませんでした。

魔女が悪戦苦闘する中、見かねてピートロも手伝い始めます。王子も何やら貧乏民家に興味を持ったのか、一緒に手伝い始めました。

黙々と三人は掃除をしました。

一応は共同作業。魔女と王子様はいい感じです。ピエトロは思いました。このまま王子様が慣れてくれて魔女を制御してくれれば自分の負担はかなり減つて楽になるな、と。徐々に王子様も魔女と普通に会話できるようになりました。

「ねえアリス、ここに吊るされてる草は何なんだい？」

「え？ ああ、それは眠り草です。普通に生えている時にはたくさん食べても効果はありませんけど、日に当たないよう乾かして粉にするとしてもよく効く睡眠薬なんですよ。」

お師匠がよく作っていました。でも本当の用途は睡眠薬ではなくて別の事。今のところはそれを王子様に使う予定はありません。王子様は次々にいろんなものを探し当てるきます。

「アリス、この本は……？」

「まあ！ 探してた魔法陣の本！ そんなにこりにあつたのね！」

魔女の仕事道具のはずなのに……

「なんだこりなにこりにガラスの壺が……？」

「ああ！ そのフラスコも！ 中身はまだ届ます？」

「いや、からつぽだけど……」

「からつぽ？ たいへんだわ！ ピエトロ、小人が逃げちゃった！」

「何言つてゐの、ご主人、このまえ小人はやつつけたよ。忘れちゃつた？」

何を捕まえてるんだ、お前は。いや、作ったのか？ しかもやつつけたつて何だよ、凶暴なのかよ。

「アリス、これはどうみても……」

「あらら、分解清掃して組み立て途中のままだつたわ。すぐこせり
ちやいますわ」

そう言つて一般家庭（あるいは魔女の家）では普通お皿にから
なさうな黒光りするそれを、ざわざと流れるよつたな慣れた手つき
で完成させて、奥の部屋に片づけに行きました。

そんな和やかな（？）、まつたり雰囲気のまま三人が掃除してい
た時。またしても王子様が妙なものを見つけました。今度はお家の
離れにある、お風呂場と思しきところです。

「ん？ これは……」

ずるずると、洗濯物の山から王子様は箱を取り出しました。あかん
よ、王子様。曲がりなりにもレディのお宅で洗濯物をいじりをする
とか。普通は通報されるよ。

取り出されたものはなんと、キャットフードの箱でした。

「やつた、キャットフードだ！」

いやいやいやいや、おかしいでしょ。なぜにこんなとこにキャ
ットフードが！

王子様はピエトロと一緒に喜びました。ピエトロなんて涙目です。
危うく今後のご飯があの超熟成煮物になるところだったのですから。
KYな王子様も先程超熟成煮物を出されたピエトロの身を案じる面
があつたらしく、ピエトロに催促されるまでも無く賞味期限を確か
めてくれました。二人の間に妙な友情が生まれていました。

「大丈夫だよ、ピエトロ。食べられるよ。ギリギリ賞味期限内だ」

ピエトロがほっと胸を撫で下ろした瞬間、洗濯物の山の中とは別に、無造作に積み上げられたぼろきれや落ち葉の下に白いものを見つけました。

何だろう。ピエトロも知りません。一人で上手に毛づくろいができて、いつも艶やかできれいな黒い毛並みを整えていたピエトロは、とくに嫌な臭いもせず洗われた事もありません。むしろほんのり甘く、落ち着くような香りがするくらいです。なのでこのお風呂場の近くに来ることなんてなくて、こんな風に散らばる物があるなんて知りませんでした。王子様とピエトロは、顔を見合わせました。二人で、そろそろとそれに近づいていきました。二人をとてもとても嫌な予感が包みます。

何やらそれは……骨、のよつな……

ピエトロは決死の覚悟で、その白い物を発掘していきました。王子様は青ざめています。

「じ、人骨だ……」

王子様とピエトロは震えだしました。王子様が泣きそうになりながら、言いました。

「先程の、鍋の中身はまさか……」

その王子様の言葉にピエトロが首を振ります。

「いやいやいや、いくらい」主人が残酷でも、そこまでじゃないよ。そんな震えなくとも大丈夫さ。例えそうだとしても、ご主人は王子を食べたりしないはずだから

「あら、王子様こんなところにいらしたのね。探しましたわ」

良いタイミングでご主人が一人の方へとやつてきました。
すかさずピエトロが問いました。

「ご、ご主人。掃除してたらいけないものを見つけちゃつたんだけ
ど？ これは、何処の仏さんな訳？ 鍋とかに入れたりしてないよ
ね？ あの鍋、真っ黒で何処か赤かつたけど、この人じやないよね
？ そもそもこの人、誰さッ！」

とても早口です。それに対して魔女アリスは淡々と、知らなかつ
たの？ とでも言わんばかりに平然と答えます。

「あらやだ、ピエトロ。じれ、お師匠よ？ それにピエトロ、あな
た一年前からずっとキャットフードの代わりに食べてたの、知らな
かつたの？ お師匠をおいしいおいしこうして食べてたじやないの」

「……っ」

本当なのでしょうか。ご主人の口から例えウソでも「嘘」という
一言を聞いたかったのですが、願いは天に届きませんでした。ピエ
トロは、あまりに酷い現実に一人で泣きながら、一つ一つお骨を集
めてお師匠を埋葬しました。

ピエトロは自炊に目覚めました。自分のご飯は自分で作る。それ
が自分の身を守る唯一の手段でした。

王子様はピエトロに激しく同情しました。

第八話 「掃除は」まめにやつまじょひ「（後書き）

原案：アグア・イスラ（水島牡丹）様

第九話 「完璧、なんてありえません」（前書き）

原案：クロクロシロ様

第九話 「完璧、なんてありますん」

僕は昔から何でもそつなくこなしていた。そう、文字通り何でもだ。見て、僕が理解したものはすべて僕の力になつた。

教えられた知識の吸收は教育係が目を丸くするほどに早かつた。自分以外の人間は一度見たものすら覚えられない愚図だと知つた。鍛錬の一つの護身術も、実際にやってみれば教本を見ているよりも簡単だと知つた。

ぼくは完璧だ。

生まれながらにして神に愛されている。そう信じて疑わなかつた。だから、これから完全に大人になるまでに、誰よりも賢く、誰よりも強く、そして誰よりも完璧になるのは容易。王子で完璧だなんて、何て絵にかいたようなサクセスストーリーだろう。

だけど誰よりも偉くだけは、なれない。
最高位に座れない。

お父様が居るからだ。

お父様は僕より間抜けで、僕より弱く、まったく完璧じゃない。誰よりも秀でた僕の足元に及ぶはずがない。

だけど誰よりも、偉い。

今現在の段階で、僕以上の能力を持つ人間は皆全部お父様の物だ、お父様の部下だ。

邪魔だ。

邪魔だ。

物凄く邪魔だ。

あの玉座はぼくにこそ相応しい。

いすれはお父様が年で玉座を僕に譲る。そんなことを待つていられない。

だから考へてた。ずっと考へてきた。僕が頂点に立つ方法を。完璧になる運命にある僕にはまだ足りない、頂点に立つための力が。

そんな時、聞いたんだ。

城の召使いが話していた森に住む魔法使いの噂を。

その魔法使いは酷く人間嫌いで人里を離れた深い森の奥に住んでいる。人々と関わることを避けているアレに関わろうとする者は皆平等に不幸になると云つ。

謎の途中退場を強いられた要人の数々は、アレの作る秘薬による犠牲者だと噂された。

この国の辺境あたりで時折起きる疫病なんかはアレが広めていると信じられている。

それなのに人間を嫌い憎んでいるとさえ言われたソレは、時に貧

しい弱者の力となつて秘術を用いて、盜賊団を始末し蛮族をすべて滅ぼし、崇められている地域だつてあると言つ。

魔法使いとは一体何なんだ。

僕とは真逆の、日の当たらない不確かなる存在。それなのに僕とは違つて確かに強大な存在感を誇り、善きにしろ悪しきにしろすべての人の心に居る。

魔法。王城の書庫にもいくつか魔術書なんかがあつたけれど、試したところで何も起こらなかつた。それどころか完璧な僕が読めば、矛盾点や不可能なところがボロボロと出てきて、実現できないことをたくさん綴つた妄言の塊だつてわかつた。

だつて、そうだろ？ 月食の夜に鳴く鶏一羽の首を刎ねて、その血をたたえた桶に雌のヒキガエルを一匹放ち、産卵させた後で雄ヘビを入れて受精させた卵を、次の月食まで光を当てるところなく暗闇の中で育て、月食の光に当て孵化させることで呪われた化け物、コカトリスを作り出すことができる、だなんて。

書物によつては雄鶏^{おんどうじ}の産んだ卵をヒキガエルに孵化させるだとか、記述がめちゃくちゃ。

ばかげている。よく考えてみたらいいじゃないか。雄鶏が卵を産むだとか、その時点で幻の化け物だ。カエルとヘビの合いの子？ 両生類と爬虫類でまつたくの別種じゃないか。しかも月食と月食の間隔が一体どれほどのか理解していなことがばればれだ。それまでの間、血液のようにこんなにタンパク質を含んだ液体を防腐剤

も何も加えないまま放置して腐敗するなと言つことがおかしい。

仮に滅菌処理をした器を用意して、そこに鶏の血を入れるまでは良いとしても、ヒキガエルやヘビに一体どれほどの雑菌が付着しているか理解しているかい？ S P F（注：特定の病原菌を保有していない状態）やノトバイオート（注：保有している微生物のすべてが知られている状態）、なんていうレベルじゃない。無菌で飼育する施設を用意してすべてを慎重に行わなくては出来るわけがない。

要するに、偽物なんだ。

だけど逆を返せば、それが実現できると言つ時点で神の領域。人外の業。

魔法使いとは、そう言つ存在なんだ。

魔法使いは、お父様の駒にない。一人悪魔がいるけれど、それはお父様の意思では動かない。僕の言葉にだつて耳を貸さない。

僕がこの駒を入れられれば、僕の目的達成が現実味を増し一段と速まる。もしこの駒が僕の意のまま動かなかつたとしても、僕が魔法を使うことが出来るようになれば……

お父様の時代は終わりだ。

ああ、なんて素敵なんだろつ。あの赤色や金色で「コチャ」「コチャ」とうざつたらしいけれど、それでもどこか莊厳で、自らの力を確信できるあの椅子に座ることが出来るなんて。

思い立つたが吉日とは言つけれど、魔法使いが住むと言われる森がどこで、どのあたりなのか情報を集めることが先決だった。残念ながら僕は立場上王城を離れることができない。そして間者のす

べてはいまだお父様の管理の下にある。

この状況で信頼のできる者、しかも城外の者を使って魔法使いの情報を集めることがいかに手間と時間がかかるか、想像に難くなかった。すべては秘密裡に行わなくては、意味がない。

そして三年が経ったあの日、僕はどうとう魔法使いを探しに出た。魔法使いの住む森の近くの村で、珍しい花の栽培に成功したと言つ報告があつたんだ。その現場を実際に視察して、献上するに値する物かどうか判断するために大臣が派遣されることになった。

最大のチャンス到来！ 外交の仕方を見学したい、と言う僕の申し出は快く受け入れられた。

問題なく視察も終わつて帰還する頃、僕は行動に出た。使節団を離れ、森の中に入つていつたんだ。

だけど、大失敗だ。ただでさえ深い森の中で迷つてしまつなんて。森に入つて迷わず目的地に着いたり迷わず森から抜けたりする技能を持つてなかつたんだ。三年の間に木こりや狩人のような森のスペシャリストに教えを請うべきだつた。自然を甘く見過ぎていた。だけどそこは完璧な僕。この経験があるから今後は同じことの繰り返しなどしない。

でもあの時は肝が冷えた。正直超絶絶体絶命みたいな？

取り乱すようなことはしなかつたけどさ。

何度も何度も同じ場所を回つての感覺に陥る。ここから抜け出せないかもしないという圧倒的な不安感。

ああ言つ感覺、なんて言うんだろうね？

後の世では名称が付きそつたけど、今の時代じゃ無理だらうね。

僕以上の天才が僕と同じ状況になることなんてまずないだろうから。

森で迷つてしまつような経験不足の僕だつたけれど、結局は神に愛されてる完璧王子だつた。

ふと気がついた時には急にどちらに進めばいいのか判り始めた。それまではこつちか？ つて疑問符付きの手探り状態だったのに、こつちだなつて確信しか沸かない。

やつぱり僕は特別だというしかないだろ？

召使いたちと合流したんだけどさ。あいつらの情けない面つたら無かつたね。

ああ、王子！ 無事で良かつた！

この森は深くて遭難者が多いう有名なのに…

もしも王子の身に万が一のことがあれば我々は！

大臣までもが揃いも揃つて取り乱してた。

まったく、お前達の一番の心配事は派遣先で僕を失つた無能さ加減をお父様に知られたりしないか、どうか、だろう？

懸命に探した、と言うのも所詮は保身のためじゃないの？

こいつらの胸中はすっかり見透かされてるつて気付いてるんだろうか。

……城内だつたら一人だけだろ？ 僕の身を本氣で案じてくれるのは、ウザいけど。

いや、まあそんなことはどうでもいいんだよ。

ここからが僕の語りたい所の本筋。現れたんだ、現れたんだよ！

魔法使いが僕のところに！

だけどソレは、噂に聞いていたような男ではなくて、女の子だったんだ。

出会いは最悪。いや、それからのことを考えても最低だね。
ただ、そいつは間違うことなく魔女だった。

第九話 「完璧、なんてありえません」（後書き）

原案：クロクロシロ様

第十話 「認める事も大切です」（前書き）

第十話 原案：クロクロシロ様

第十話 「認める事も大切です」

恥ずかしながら天才の僕が、魔法使いに接觸できるせっかくのチャンスを生かせなかつた。もうそれだけでも忸怩たるものなのに、その日は間違いなく人生の中で最悪。王宮お抱えの占い師に見てもらつたらきっと今は僕の天中殺や大殺界なんじやないだろうか。

それはいいんだけど、次の作戦を考えていた時、その子が現れた。「その子」というのが相応しい。女性っていうには幼すぎる印象だつた。

おいおい衛兵さん。無能だ無能だとは前から思つていたけど、こんな小猫連れの子供の侵入者まで許しちゃうわけ？ まあいいや。ここは爽やかで人望も厚いすてきな王子様のまま、優雅にお相手いたしましょう。

……それがすべての過ちの始まりだなんて、その時は思いもしませんでした。

護身具の一切を持たず相手に歩み寄るなんて、これから先は絶対しない。僕も平和ボケしていたんだつて思い知らされてしまった。だってまさか、初対面の女の子が出刃包丁片手に僕の前に現れるなんて、考えていた最悪のさらに斜め上。そして第一声が

「……王子様、私の家に来てください」

何の冗談だと。僕の目の前で繰り広げられるイリュージョン。さすがに天才の僕でもこの超展開にはついていけそうにない。戸惑つているとさらに一步女の子が歩み寄ってきた。

「――」笑つてゐるけど包丁の切つ先、ちょっと刺さつてない？
ねえ、どう見ても先つちよが僕の服に飲み込まれてるんだけど！
これはもうお願ひ、依頼ぢやない！ 明らかに脅迫だ。一国の王子としてそんな要求、自分の命がかかっていたつて従うせんかつ。そして次が僕の返答。

「 ようこんで 」

（あつさり従いやがつた！）

（動搖しすぎて意に反したことを口走るなんて意外と凡夫なのね）
（まあまあ、それが入つてもんですよ。結局自己の保身を成立させなくてはこの先の夢の実現すらままならないのが現実ですから。“所詮”王子と言つても人の子ですよ）

ふつ 周りの愚図が何て言おつとかまいやしない。僕はこんな危険な状況にあつても決してチャンスを見落としたりしない。ここが僕が非凡たるゆえんなんだよ、まあ言つてもわかるわけないか。

従うしかないじゃないか！ だつてあらうとか、猫が喋つたんだよ？

マジカルだよ！ 些細なことかもしけないけど、魔法を感じずにはいられないつ

しかもその猫、その女の子に『魔女なんだから魔法を使おうよ』つて言つたじゃない？

もう確定だ。確實にこの子こそ僕が会おうと思つていた魔法使い！ 確実だ！ 凡人が魔法使いを探しに森に行つても、住まいも分からぬ、ルートもわからないでは遭難するのは確実。そう、シャンパンを一気飲みしたら暖氣おぐみ（注：げっぷ）が出るくらいに確実！

まさか向こうから来てくれるなんて！ こりゃ、ついていくしかないねって思った訳。

え？

猫が喋りだす前にもう魔女の要求に従つてないか、つて？ 気のせいじゃない？

だつて僕は完璧だぜ？ そんな情けないことするわけがないつ

とにかくその子、出刃包丁突きつけて、恍惚としていた。僕の顔見てどう？ みたいな表情してるし。意味わかんないって。それともあれか、魔法使つための何かの儀式？

あ、なるほど、そういう事か！ トランス状態つてこの事か。いつの間にか黒豹が居る！ 魔法だ！ とうとう直に魔法を見ることが出来ました！

つーか、衛兵達の情けないこと情けないこと。たかが黒豹一匹にびびつて僕を助け出せないなんて……

いや違うよ？

助けられちゃ僕の目的が達せられないから困る！ だからこれで良いんだけど！

部下の鍛度の低さは上司として気になるじゃないか。ベベベベベ、べつに助けて欲しかった訳じゃないよ？

とまあ、こんな具合で拉致さ…… 同行することになりました。

念のため言つておくけど任意でだから！ でもトランス状態の魔女の持つ出刃包丁、ちょっとずつ刺さり方がえげつなくなつてきてます。このままだとぶつくりと来る！ さすがにこれはまずい！ 誰か魔女を正気に戻して！

そんな風にさりげなく困っていたところに途中で知り合いが駆け

つけてくれたんだ。

それがアルファーネ。僕を取り巻く愚図どもの中でも、少しだけマシな奴。

それにこれだよ、これ！ 女性つていうの！ 比較にあげられないけどやっぱりこの魔女はまだまだお子様だね！ だけど僕は正直コイツ苦手だ。たとえどんなに器量良くスタイル抜群で、何をさせても絵になる存在だとしても、No thank youだ。僕の許嫁という立場になつてるんだけど、はつきり言つてウザイ。べつたりくつ付きたがるし。

何よりも許せないのがさ、ぼくより強いんだ。

師範より強くなつた僕が勝てない姫様？ 立つ瀬がないなんてもんじやない。ここはどこの女帝国家ですか？ いや、それも剣持つた僕を一度の手合させで百回くらい殺せるんじやないかつてくらいの豪傑。それも、素手でつ！

何その人類規格外。
外見美人の中身ゴリラ女！

とまあ、真に残念ながら（？）この雌ゴリラ、もといアルファーネ相手じゃあ黒豹君も敵じやない。

熊とかドラゴンとか平氣で殴り殺すしね。殴り殺していいドラゴンなんて居れば、の話だけれど。今じゃ数もともも少なくなつて、ドラゴン自体が人間に歩み寄つて共存の道を模索している最中。とても友好的なんだ。手を無闇に上げようものなら人からもドラゴンからも非難にあつて社会的に殺されてしまう、危険な情勢にあるんだ。いや、この際どうでもいい。

魔法を学びたかったけれど、このままではDeath or Dieだ。出刃包丁からは何も学べないことで、諦めますよ。

そう、今だからこそ、言えるよ！

君は素敵だ、僕は君となら結婚してもいいっ！
だーかーらー、助けてアルファーネ！

そう、彼女にケンカで勝てる相手なんて無い。

……そんな風に思っていた時期が僕にもありました。

だけど、僕の後ろで包丁を持っていたのは、魔法使いだったんですね。

第十話 「認める事も大切です」（後書き）

第十話 原案・クロクロシロ様

王子に一言。 美人さんを無下にしてるんじゃねえよ、若造がつ！

第十一話 「現実は非情ですがそれほど悪い物でもあつません」（前書き）

第十一話 ～原案～ クロクロシロ様

第十一話 「現実は非情ですがそれほど悪い物でもあつません」

いや、彼女らの動きがあまりにも自然で流麗、かつ早すぎて何がなんだか判んなかつたんだけど。

アルファー・ネの腹に出刃包丁が刺さつてゐる。

よつしゃ！ 僕を捕える範くわいが一つ消えてラッキー！

じゃねえ！ なんだそれ、おい魔女！

お前何考えてんだよ！ 魔女だろ？ 魔女つて後方支援的な存在じゃねえのかよ！ 今のばりばり全快で肉弾戦だ！

魔法覚えたら隙見て逃げよつと思つてた俺、終了。

勝てねえええ！！

黒豹居なくとも勝てねえええ！！

なんで、なんでなんでつ！ 僕をさらつわけ？ そんだけ強いなら余裕だろ？ お父様にしつけよ！！

一番偉いのパパだよつ！

もう混乱混乱、大混乱。別に恥ずかしくないね、だつて僕以外ならみんな氣絶してゐるような局面だらうじ。この魔女の目的はやっぱリアレ？ 誘拐して身代金だの政権に対しての抗議だの、国家の転覆を図るだの、そう言つテロリズム系？ この幸せそうな顔は任務達成が容易だつたことと、自分の理念に近づいたこと、そして得ら

れる報酬を思つてなのか？

だとしたら僕は毅然として後ろの彼女に立ち向かう！　この国あつての僕（）の地位（）。

そして僕を守ろうとしてくれたアルファーネへのせめてもの手向け！

だけど甘かつた。心から後悔したね。あれだけ顔を紅潮させるほどの濃い憎しみの奔流は初めてだつた。理解したよ。

あ、楯突いたら殺されるな。

ならば従順でいるしかない。ごめんなさい、僕が調子に乗つてました。神に愛されてたとか、自惚れましたっ！

悪魔に愛されてたんです！　王子と言う生まれながらの立場でなければ凡人でした！　生まれた時からチートな環境で、悪魔にだまされて調子に乗つてたんです！　これを凡夫と言わずに何というのです？　本当の僕と言う物がよくわかりました。

だから、許して！

だけど彼女には僕の声が届かない。そのまま拉致。いや、思い返せば謝つたところでプロフェッショナルが任務を途中で中断することなんてありえないよね。何から何まで緊急事態で僕も判断がつきません。だつてほら、僕凡夫ですから。

それにしてもそこから先は本当にファンタジーの連続。

拉致られる途中で僕は新しい名前をもらいました。使わないけど。

子猫にすら爆弾を使う魔女。

鬱葱とした、陰鬱な魔法使いの森の奥に広がる爽やかな空間。

そこに建つ、風景とミスマッチなあばら家同然の魔女の城。

散らかり放題で謎の鍋が煮立ち、今まで僕の城で感じたことの無い芳香が広がる（だつてほら、彼女にしたら好きでたてているのかもしけないじゃん？ 悪臭何て言つたら僕の命は鍋の中だ）。

脱衣かご（？）の中に埋もれるキャットフード。何でこんなところに？

その近くに埋もれる人骨…… ひい

いろんな意味現実離れしそぎていて、精神が崩壊しそうな魔女の家。Amazon Fantasy！

そんな彼女が僕に名前をつけてくれ、と誓つ。え？ 名前が無いの？ 最後までファンタジーだと思ったね。

彼女にぴったりだと思ったイメージからいくつか候補を挙げた中、最終的に彼女が選んだのは「アリス」。

僕は「ミザリー」だと思ったんだけど。

彼女と一緒にいる黒猫、ピエトロとはずいぶん仲良くなつた。すごくいい奴。常識の通じないアリスと違つてとても良識があるから、この空間に居ても何とか精神崩壊をきたしてしまつこともない。それにどこか弟みたいで可愛いんだつ！
それにしてもこんなにしつかりしているのに扱いが酷い……。
一緒に強く生きていくうな。な？

あ、そうだ。アリスに一つだけ遠慮なく言いたいんだ。

アリス。少しくらい魔法使え！

第十一話 「現実は非情ですがそれほど悪い物でもありますん」（後書き）

第十一話 ～原案～ クロクロシロ様

第十一話 「見た目が悪わざわざ」とは「」の事や（前書き）

第十一話 ～原案～ 八束様

第十一話 「見た目で騙されるとは何事か」

アリス達が人骨について一方的に盛り上がっているところ、お城では騒動が起きました。ある御方が帰ってきたからです。王子様の誘拐の件はとりあえず解決に向けて進行中なので、もうすっかり盛り上がりを失っていました。第一案としての軍隊の出動も検討され、部隊の編成も計画が進んでいます。

「王子が誘拐されたというのは、眞の話でしょうか」

その御方は非常に小柄で、後ろに仕えている騎士の胸の高さほどもありません。それでも玉座の間を守る近衛兵はとても緊張した面持ちで答えました。

「眞であります、聖女様」

そうこの御方こそ、この国の象徴でもある聖女様なのです。

聖女様のその見た目は非常に美しく、見るもの誰もが見惚れる存在であります。まだあどけない少女らしさを残した顔つき、頭脳も明晰で法術に長けた、ある意味魔女とは対極的に崇められる存在としてはぴったりな容姿と素質なのです。白い服は天使を想像させます。

彼女の法術、法力は群を抜き、そして彼女の継承した奥義は門外不出。王子様もかつて一度この方にご指導を願ったのですが、一蹴されたそうです。

「誘拐したと思われるは森の魔女とその使い魔だと思われます。

現在、魔女の討伐と奪回のための隊を編成中ですが、なにぶん魔法

には不慣れなものが多く……」

「そのため報奨金を出してまで外部の手練れに依頼、ですか……。女性については王子との結婚、つまりは地位の約束ですね。いけませんね、欲に惑わされた人々はよく道を踏み誤るものですね」

おつしやる通りなのですが、とりあえずあの時点でお城の中に魔女に対抗できる人材はいなかつたため、素早い行動のためには致しかなかつたのも事実。そんな感じで近衛兵は答えました。愛らしい口元から一つ小さくため息を吐いた聖女様は一つの事に気が付きました。

「ちょっと待つて。魔女？　あの森に住むのは『男』の魔法使いではなかつたのですか？　この数年彼のことを聞くことはありませんでしたが」

「そ、それが」

近衛兵はあの時の光景を伝えました。彼自身はこの玉座の間を守つていたため直接見たわけではなく又聞きです。まだ十代半ばとしか思えない背の低い少女が突然城内に現れ、連れていた黒猫が人語を話し、黒豹に変化し、そしてこのお城最強の女傑を倒したこと。異常な事態であつたことは完全に国外にいた聖女様にも伝わりました。

「なるほど、ちょっと私はこれから王に掛け合つてきますね。お通しいただけますか？」

「え、ええ勿論。聖女様でしたら何の問題もありません。王と掛け合つ、ですか……？」

「はい。あの森に住む者が関わっていると言つのでしたら、魔法に通じた者が必要でしょう？　王子奪還に私も協力させていただきます。ただ、報酬に関して申しておきたいことが」

近衛兵は、さすがは聖女様だ、と思いました。聖女様がもし王子様を奪還したのであれば、彼女も女性ですから報奨金と、それと王子様との結婚が約束されます。ですがそのような世俗にまみれた報酬を受け取つてしまつては信仰と国威に関わるかもしません。きっと断るのだ。何とも思慮深く、人々の規範である存在であることか、と敬意を払います。ところが。

「報奨金、結婚の代わりに、私好みのおじさまを3ダースほどで王子を奪回すると」

……

……え？

その神々しいお姿を一目みたい、とやつてくる信仰心あふれる人々がたくさんいる存在の口から出るとはとても思えない一言。

この御方は王子様が法術を習いたいと申し出た時に一蹴したのは、内々に秘めた野心を見抜いた、と言つことではなく単純に王子様のような若造には興味がなかつた、ただそれだけ。今回も各国巡礼という表向きの目的をさておいて、各國の聖女様好みのおじさま探しをしていたくらい、意外なことに彼女は中年の渋いおっさんが好みです。純潔とかそういうのは関係ありません。ちなみにこの国の王子様は既に陥落済です。

あんまりにも美しく爽やかな笑顔で答えた聖女様は扉を押し開きました。きらきらと金糸の髪が光に照らされて、その透けるような淡青色の瞳は希望で満ちてます。近衛兵はその顔に見惚れて、その言葉を理解するまでは随分と時間を有しました。

そして言つていふことがおかしい事に気付いたころには既に聖女様は御付の騎士も無しに玉座へと乗り込んでいました。

「せ、聖女様……？」

扉の前に立つ近衛兵の言葉が空しく響きました。

第十一話 「見た目が悪わざぬ」と「」の事です」（後書き）

第十一話 ～原案～ 八束様

第十二話 「先入観は見える物見えなくします」（前書き）

第十二話 ～原案～ アグア・イスラ（水島 牡丹）様

第十二話 「先入観は見える物見えなくします」

聖女様の発言のおかしさに気が付いた近衛兵は任務を放棄して、守らなくてはいけない扉を慌てて開けて玉座に向かいました。しかし彼が入って目にした光景は、隣に立つ聖女様に向けて満面のだらしない笑顔を向ける座つたままの王様と、その王様につこりと穏やかに微笑み返す聖女様。玉座の間の絢爛さと併せ見ると、絵画と見間違うほどの光景でした。聖女様が丁寧に頭を下げているところを見ると、あつという間に要件は済んでしまったようです。

「せ、聖女様、王様！」

「む、何事だ。入室を許可した覚えはないぞ」

二人の方に駆け寄り玉の前に傳く近衛兵に、王様は慌てる様子もなく表情を変えました。近衛兵に向けた顔はいつも王様のもので、何事だ、と聞かれましたが、ストレートに聞けません。何と言えば処罰を受けない、もとい二人に対しても失礼にならない質問になるのかと言うことには頭がいっぱいです。わずか数呼吸の間に頭脳をフル回転させて「これだっ！」と言つ答えたに至りました。

「魔女征伐に聖女様がご協力くださる、と伺いました。王様、聖女様および聖靈院が全面的にご協力くだされば士気も揚がると言うもの。私としても大賛成にござります。ですがこれからは聖靈院との協力を中心にするとなれば、報酬を王子奪還の目的とするよこしまな者達による妨害も考えられます。そうなる前に個人に対する成功報酬を見直されてはいかがかと……」

なるほど。個人報酬を無くさせる方向に流れを持つていいくつもりです。あの条件 聖女様好みのオジサマ3ダース を無効にす

るには自然な発想です。オジサマということはほとんどが妻帯者であるでしょう。そのオジサマを3ダースも用意するとなると、相当な数の家族を犠牲にします。オジサマの中には家庭を持たないわずかな例外はあるでしょうが、それを3ダースも用意することは並大抵な事ではありません。しかも『聖女様好み』でなくてはいけません。一般的な倫理を引き裂きかけている聖女様の企みを阻止しながら、しかし直接的に感じさせない進言としてこの短時間に出した解答としてはそこそこではないでしょうか。

そして確かに、聖女様が動くのであれば聖女様を頂とする聖靈院も必然的に動かざるを得ません。「聖女」とは私的な存在ではなく公的な存在なのです。その事を王様に再確認させ、聖女様が好き勝手に動きにくい状況を作ることにもつながります。

聖女様の近衛兵に対する「考えたわね」と言つ憎々しげで歪な笑顔に、近衛兵は背筋に冷たい物が走るのを感じました。しかしさすがは聖女様。王様の方に向き直った時にはすでにそのような表情を消しています。

「大丈夫ですわ。私が秘密裡に個人として動きます。聖靈院が表だって動くことが無ければ邪惡なる者がこの件に介入する事は最少に抑えられるでしょう。王子の身の安全を確固たるものとするのであれば、私が一人で向かう事が一番ですわ。ですから王様」

「ええ、聖女殿の良きにお任せいたします」

「くつ この聖女様も切れ者です。組織での行動に切り替えられて個別報酬を無しにするような流れを断ち切られました。邪惡です。自分の利益だけのために無知なる者を利用する、吐き氣を催す邪惡です。」

王様は聖女様に完全に毒されています。抵抗できません、いえ、しません。それに聖女様はこの国で一番の法力、法術の使い手。王子奪還にもつとも近い存在であることは間違いません。いかな

森の魔女と使い魔と言え、聖女様には敵わないでしょう。反対する理由なんてありません。

何より国家権力が入ってしまった以上、もつこの勇敢な近衛兵個人の良識だけでは刃向えません。その事を十分に理解している彼は諦めることにしました。近衛兵には腕っぷしだけでは成れません。

「聖女様が王子様を助けてくれるのなら、我々も安心です。して、具体的にはどうやって、王子様を奪還するのですか？ 相手は悪の魔法使いです。いくらでも卑怯なことをしていくことでしょう。」

王様および臣下の者達一番の心配は、人質にされた王子様が、何かの拍子に殺されてしまうことです。

ですが流石は聖女様。何の不安も無いように、そして不安を与えないようににこやかな笑顔のまま言い切りました。

「大丈夫です。あの森に住まう者は悪の魔法使い。私の神の加護を受けた聖なる御力の前に悪の魔法は通用しません。」

魔王を倒すのは、必ず勇者の光の剣です。理屈は分かりませんが、魔王は聖なる力の前には抵抗できません。魔王は最後には打ち倒される運命にあり、それは決まって邪悪なる企みを持つ悪です。聖女様は人々が信仰する神の代弁者。「善」の象徴そのものです。

「いつの世でもそうであるように、聖なる力の勝利をお待ちください」

にこやかな聖女様には見る者すべてを無条件に信じさせる、そんな不思議な力がありました。そう、悪は打ち倒されるのです。「聖なる」御力にはね。

「それではオジサ…… 王子様の奪還準備を始めます。…… その前に王子のために殉じた勇敢なる一人の英靈に祈りをささげさせてもらえないでしょうか」

……今「オジサマ引換券」と言いかけましたね？ 真実の「聖」は一体どこにあるのでしょうか。

玉座の間から退出した聖女様は城内の至る所で声をかけられます。その度にその笑顔で応えます。城は暫し、聖女様のお陰でまつた霧囲気に包まれました。

王子様がさらわれてもう三日経ちました。

散らかり放題だった魔女アリスのお家の掃除もとうとう終わってひと段落した頃のことです。突然、女人人が魔女の家に入つてきました。正面玄関からいらっしゃいませ！ おひとり様ですか？！

「王子様を返しなさいッ！」

どうやら刺客です。プラチナブロンドヘヤーの美女。王子様との結婚を狙う女たちの一人でしょう。その美女は拳銃を片手に魔女へ

と向かっていきましたが、たつままで掃除をしていたのでアリスは丸腰です。ピエトロは慌てました。

「「」、主人！」

「」の距離ではどんな下手クソが撃つたとしても命中確実。間に合いません。魔女アリスも絶体絶命、と思われたその時、魔女はやつと魔法を使いました。

彼女の右手は光に包まれ、家の奥からも同じように光が放たれました。光っていたのはほんの少しの間で、光が失われた時には魔女アリスの右手には黒い何かが握られ、指はそのトリガーに掛かっています。ぱぱぱっと軽い破裂音が部屋を満たし、きんきんきん、と床に金属物が落ちる音が続きます。

使つた魔法は召喚魔法。呼び出されたものは魔女アリスが愛用する黒いマシンガン。

それを腹にぶつ放された美女はぱたりと倒れ、どくどくとフレッシュな血溜りを作ります。痙攣するようにびくびく、と動いていましたが、すぐに止まってしまいました。

「迷いの森を通り抜けてきたのは褒めてあげるけど、無謀で無策なのはいけないわ。運だけで「」に来たのでは殺してくれと言つづなものよ」

「あーあ、そこ、ピエトロと一緒に拭き掃除したのに……」

「全くよ、血のシミはなかなか取れないのよ。これなりマシンガンじゃなくて、爆弾を使えば良かつたわ」

「いやいや、アリス。爆弾だと部屋が丸」とダメになるからよくなによ

「「」、主人。ボクがこの人、ちゃんと埋葬するからー」「レ」、飯

ねとかは勘弁だよ！」

「四の五の言わずに薬莢を片付けなさい。そりじゃなければそれがご飯よ！」

王子様はだいぶ魔女アリスの思考に慣れたようです。アリスは薬莢^{ジャム}が詰まらないようマシンガンの手入れを欠かしません。ピエトロは急いで簞とチリトリを取りに部屋の奥に向かいます。ご飯に深いトラウマを持ったようです。奇妙な魔法使いパーティがここに結成。

……聖女よ、この魔女は攻撃に魔法を使わないぞ！

第十二話 「先入観は見える物見えなくします」（後書き）

第十二話 ～原案～ アグア・イスラ（水島 牡丹）様

第十四話 「手紙は丁寧に書きましょ」（前書き）

第十四話 ～原案～ 八束様

第十四話 「手紙は丁寧に書きましょ」

ピエトロが、帰らぬ人となつた加害者兼被害者を埋葬している頃、魔女アリスの家に一羽の白い鳩がやつてきました。人に慣れているようで、窓辺に止まつたその鳩を見つけた王子様が近づいて触つてみても逃げようともしません。王子様がある事に気がきました。足には筒が付いています。筒を開けてみると中にお手紙が入つていました。

「……？ アリス、君宛てだよ。伝書鳩を飼つていたのかい？」

入つていたのは上質な封筒で、その封に用いられている蠅も上等な物で、薄く金に輝いています。宛先には「森の魔女へ」と丁寧に書かれている一方、中央には太めの筆で『果たし状』と勇ましく、荒々しく書いてありました。ちぐはぐしているにもほどがあります。魔女の家に早々と慣れて、警戒心も薄くなつてフレンドリーになつてきた王子様に呼ばれて、アリスはにこにこ笑顔でやつてきました。

「伝書鳩？ いいえ、私は特に飼つてませんわ。どこから来たのかしら」

「うーん、アリスの鳩じやないとしたら一体……。でも宛先が『森の魔女』だよ。他にこの近くに魔女がいるのかい？」

「いいえ、それも存じませんわ。お師匠がこの辺唯一の魔法使いだつたはずですもの。それにしても森の魔法使いにケンカを売る度胸のある人もいるみたいね。うれしいわ」

二人とも首を捻りながら、でもにこやかに封書を開きます。何だかすごく自然で良いムードです。取り出された便箋もやはり上等な物でした。

「王子を返しますか？　返しませんか？　いずれにせよ悪は滅びます。首を洗つてお待ちくださいませ」

アリスは文面に目を通すとにっこりと爽やかに微笑み、次の瞬間、
ジヤつ！　とお手紙を縦に引き裂き、ぱいっと投げ捨てました。王子様はその便箋に見覚えがありました。拾つて確認してみるとそれはやはり聖靈院の高官が用いる書簡。文面の最後に筆で「聖女」と書かれていました。本文よりもでかでかと。

「どうしたんだいご主人？」

埋葬を終え、ねこ用のショベルを担いだピエトロが戻つてきました。泥だらけになつてしまつたから苦手だけど水で洗つて、早く毛づくろいをしたいな、と思つていました。極たまにご主人が優しくお風呂に入れてくれたことがあります。三日間もお掃除を続けてお家をきれいにしました。ご主人を狙つて返り討ちになつた刺客の血痕をきれいに掃除して、丁寧に埋葬もしてきました。ひよつとしたら今日はご褒美にと、ご主人がきれいにしてくれるかもしれません。うきうきしながら戻つてきたのですが、若干ご主人から出ているオーラが歪んでいることを、おヒゲセンサーが感知しました。その元凶は、どぐるりと見渡すと、王子様が引き裂かれた便箋を持つています。これだ、と直感したピエトロがその手紙を覗こうとすると、便箋は突然ぼわっと燃えて灰になつてしましました。燃え上がつた瞬間に驚いて手を離したため、持つていた王子様に火傷はありません。

王子様がアリスの方を見ると、アリスはきつ、と睨んでいて、二の方にびしと人差し指を向けていました。どうやら火炎の魔法を使ったようです。

「「」「主人、今の手紙は？」

「……あの女狐、こんな時まで邪魔するのね。まったくあの年増好きが。ピエトロ、一番臭そうな便箋と封筒を持つていらつしゃい、いますぐー。」

質問に答えないままアリスが命令します。ピエトロはかよつとがっかりです。『』褒美はきっとありません。ですがそこは使い魔。ご主人のオーダーには忠実に動きます。ピエトロは素早く領き、整理したばかりの棚を器用に開けて便箋と封筒を丁寧にも一番下のを取り出しました。アリスはペンを取り出すと、便箋に文字を書き付けます。

「えーっと。死ね、と」

「「」主人、それ手紙とは言わないよ」

「いいのよ。向こうは『果たし状』を送つてきただから。ピエトロ、ひとつとと出して来なさい」

「え？ 『』に？」

「お城によー。そんなことも分からぬの？ 聖女つて書いてあつたじゃない」

「え、つと、読む前に『』主人が燃やしちやつたから」

「あら、あなた泥だらけ。全くもうー。そんなんじゃいい笑いものよ、ピエトロ！ 恥ずかしくて外に出せないわー。」しつけいらっしゃー。」

全くピエトロの言葉に耳を貸さない魔女アリス。遠巻きに見ていた王子様はピエトロをちょっとかわいそうに思いましたが、ピエトロはつれしそうです。望んだ形とは程遠かつたのですが、なんだかんだでご主人に汚れを落としてもらつことが出来るのですから。

離れのお風呂場でじゅぎゅぎゅぎゅと乱暴に黒猫が洗われています。

ぬるめのお湯であれば最高だったのですが、残念ながら急な事だったので汲み置きの水です。でも泥汚れも付いたばかりの物だったのでそのくらいでもあっさり落ちていきました。三度、四度洗われて、すすぎの水に汚れが付かなくなつたところで水から揚げられました。がしがしと乱暴にタオルで拭かれます。全体的に乱暴だったのですが、ピエトロは文句ひとつ言わずおとなしく、嬉しそうにしています。ただやつぱり水で洗われたため少し体が冷えました。くしゅん、と小さなかわいいくしゃみを一つしましたが、今日は幸いお日様がぽかぽかと気持ちのいい日です。日なたに出ていればすぐに乾いてくれることでしょう。

「ほら、きれいになつた。それじゃあさつと行つてきなさい。」

アリスがピエトロに問答無用とばかりに手紙を渡すと、ピエトロは久しぶりに使い魔らしい仕事だなんて思いながら窓から飛び出して行きました。迷いの森で迷わずに行けばお城までは徒歩で半日です。

そして家の中に残されたのはアリスと王子様、一人きり。アリスは普段の八割増しの笑顔をきらきらと輝かせています。ですが手元にはなぜか、あの真っ黒なマシンガンが一丁。

手紙を送ってきたのはこの国の聖女。魔法を使う者で聖女の存在を知らない者は無いと言つても良いくらいの存在です。魔女アリスの物ではない伝書鳩が正確にアリス宅に届いたと言つことは、この伝書鳩には何かしらの法術がかけられているだらうと思われました。おそらく王子様の持つ王家由来の物をたどるようにセツティングされているのでしきう。そして、聖女が手紙を送るためだけに鳩を飛ばしたとは考えられませんでした。王子様の居所を探る意味も兼ねて、鳩がたどり着いた地点を特定する法術が同時に仕掛けられてい

るはずです。

つまり、相手がいつこの魔女アリスの家にやつてきてもおかしくない。ピエトロをお遣いに出したのは手紙を届けるためと言つよつも、最短コースで来る可能性のある聖女を迎えたためだつたのです。もちろん迷いの森で聖女が迷つて、到着が遅れるのであればそれで構いません。お遣いを終えたピエトロが戻ってきたら戦わせればいいのです。

ただ、森の方が昨日あたりからやわついています。聖女でなくとも、また先程のよつな刺客がやつてくるかもしません。油断は禁物。

「王子様、危ないですから窓辺からちょっと下がつていた方が良いですわ」

魔女アリスの目つきは鋭く、とても素人のよつには見えません。片付いた家のあちこちから再びいろいろな物を取り出してきて、窓辺と入口のドアの辺りを中心に、何やらしそごと作業をはじめました。

第十四話 「手紙は丁寧に書きましょ」（後書き）

第十四話 ～原案～ 八束様

第十五話 「期待しあるの止つましゅう」

アリスに手紙を届けた伝書鳩は今は鳥かごの中に入っていました。その鳥かごはもともとカナリアや文鳥のような飼い鳥のためのものではありませんでした。

長いことお師匠と女の子と黒子猫しかすんでいなかつたこの森の家は、魔法使いのお屋敷です。お屋敷と言つても、ほつたて小屋みたいな見た目テキトーな作りですが。

そんな魔法使いの邸宅にある空っぽの鳥かごと言えばおそらく何かの儀式用の鳥を入れておくための物でしょう。止まり木が一本あるだけの、およそ觀賞用とは言えない単純な檻でした。

そのかごは窓のあたりにかけられ、そよそよとやさしく吹き込む風にやさしく揺られていました。飛んで疲れた鳩も穏やかに止まり木にとまつっていました。誰が用意したのでしょうか、かごの中のヒサ入れに見るからに毒々しい紫色をした小さなとつもろこしのような粒々のご飯が入れられていました。鳩も初めはいぶかしんでいましたが、お腹が空いていたのとちよじつ口にしていました。

「ねえ、アリス」

「あら、なにかしら王子様」

ものすごく輝く笑顔をみせる魔女アリスの頭の上には誰が見てもはつきりわかるハートマークが浮いています。銃を手に取っていた時のソルジャーの顔つきはどこにも感じさせません。プロです、戦争の。お屋敷の一階にある窓全部に対し工作を終え、今度は玄関のドアノブに細いワイヤーをかけていました。その作業もとても手慣れた感じで、王子様は関心して見ていました。

「アリスはどこでそんな武器の使い方を訓練したんだい？　あと、聖女の事を知っているみたいだけど……」

誰もが一度は思ったことのある疑問を投げかけました。

「やうですわね……　話すと長くなるので長くならないよつで。どこから話しましょう？」

よぐぞ聞いてくれました、と言つわけでもなさそうですが、自分の事に興味を持つてくれたことに魔女アリスはとても気分を良くしてさらに笑顔になりました。彼女が話し始めようとするとやいなや、外で爆音がしました。一人は仕掛けに触れないように気を付けて窓辺に駆け寄り外を見ます。

「ああ、そこに居るのは分かってますわ！　3ダースのオジサマたちの引換券、こちらに渡してもらいましょうか！　素直に応じれば命は助けてあげることも考えてても良いですよー。気分によつては考えませんがっ！」

清廉で可憐な容姿からつむぎだされる言葉としてはサイマーの部類に入ること間違いなしな台詞が森の中に響きます。純白のロープを身に纏う、金糸の髪に青い目をした美しい少女が大きな木の高い枝の上で片膝をつき、魔女達の居る見た目ほつたて小屋を見下ろしていました。魔女アリス愛用のマシンガンの射程からずつと遠い、魔女のお家からそこそこ離れた所でしたが真っ白なロープはとても目立ち、一人はすぐに声の主が誰なのか悟りました。聖女様です。

「来たわね、あの女……　ピートロはどうしたのかしら」

「ま、まさか！　あの白い悪魔が！」

その頃ピートロはおつかいに夢中でした。

小さなバッタがぴょんぴょん跳びはねるのを見ると思わず追いかけたくなります。野道の脇に咲いていた花が風に揺れるとその小さな手でもっと揺らしたくてたまらなくなります。そのくりくりとした黄色の田に映る大きな世界のすべての物が、まるで彼を遊びに誘つているかのように魅力的でした。

地面に落ちているただの小枝も立派な遊び相手。ぱしつと手で払つてその後を追い、追い越した直後に小さくジャンプして上から押さえつけます。口にくわえて上に放り投げ、後ろ足で立ち上がると、宙に舞つた小枝を捕まえようとフリーになつた両手を伸ばします。そして自分の手を逃れて再び地面に戻ってきた枝を、今度は何をするわけでもなくじーと見続けました。ふつと自分の仕事を思い出して歩き出しました。

『主人に渡された手紙は背負つているポーチのような小さなカバンの中に入っています。最短コースからはとつぐのとうに外れて、正直迷子になつてるんじゃないかと思つてしまっています。

魔女アリスにとつて完全な誤算。

『の分だとおつかいが終わるまでに何回か夜明けを見ることになります。

その時、お家の方から爆音が響いてきました。

「あーあ、『主人。また爆弾を使って……。いい加減魔法を使えば魔女らしくていいのに。わかつてゐる?」

のんきなものでした。

第十五話 「期待しあがむの止まじょう」（後書き）

「これからしばらくなれる担当分。

猫かわいいよ、猫！

第十六話 「チャンスは逃さず見つけましょ」

ピエトロが子猫らしくかーわいーいおつかいを遂行しているのをヨソに、魔女の邸宅（見た目ほつたて小屋）の周りの雲行きがとても怪しくなっていました。

聖霊院の最高権力、聖女様は偉そうに木の枝の上から悪の居城（見た目ほつたて小屋）に向かつて指差しました。すると森の奥の方からたくさんの人影が現れ、聖女様が指差した建物目指して行軍していきます。

ですが、どことなく変でした。

いすれの兵士達も目は虚ろで顔つきに生気が無く、どことなくだらんとしていて、動きがややゆっくりと緩慢でした。

そして、全員女のようです。それにみんな大人で顔立ちの整ったかなりの粒ぞろいでした。でも死んだ魚のような眼をしているうえに動きがアレなので、煌びやかな感じは全く無くて相当に不気味でした。衣服が赤茶色に汚れている者もいます。血……でしょうか？

王子様と魔女アリスは森の奥からぞろぞろと聖女様が率いる軍勢が現れたのを見て、不意な狙撃を警戒してしゃがみこんで隠れました。どこから出したのか、アリスは鏡のついた棒を覗かせて外の様子を観察します。森から現れた軍勢は両腕を前に力なく伸ばし、ゆっくりとですが確実に迫ってきます。薬草用の畑のある所にまで近づいてきたところで魔女は鳥かごのかかっている窓からちらりと黒い鉄の塊をのぞかせ、しばらくマズルフラッシュ^{（またた）}を瞬かせました。畑が愛用のマシンガンの射程距離の目印なのです。びっくりし

た鳩がかごの中でバタバタと羽ばたいたので、白い羽毛が少しだけ部屋の中に散りました。

一通り撃ち尽くし、マガジンを交換して鏡で外を見ます。何人の女兵士達が倒れています。ところがムクリと起き上がりました。

「ちひりどこであれだけの死体を」

「し、死体？！」

もはやこの戦場において王子様は蚊帳の外です。と言つた、避難をせな」とマジ危険です。

「あははははー！ どひー！ 私の不死の軍団はー！ 聖なる御力で生き返らせるのは簡単ですが、それだとまた死んでしまいますものねー！」

なにを言つてこるのでしよう。ものすこじとを口走つてこるように聞こえます。

「ああ！ 銃なんか捨ててかかつてきなさいー！ 自慢の魔法を見せとじ覽なさいな！ 悪の魔法は私の法術の前では無力である事を命と引き換えに教えて差し上げます！」

「つたぐ、アンタの性根を生き返らせる聖なる力を教えてもらいたいものね」

魔女がまともなことを言いました。王子様は壁際で小さくなっています。外では銃殺されたはずの女達が再び立ち上がり、歩き出しています。あー、とか、おー、とか声とはおよそ言えないような音が喉の奥から響いていて、終末っぽい光景が広がっています。郊外の森の中に傘のような名前の製薬会社の地下施設をカモフラージュ

するための洋館が建つていて、後にそれが原因で壊滅することになるタヌキみたいな名前の街が思い起こされます。

こんな魔と暴力に挟まれ、しかもそれをコントロールすることがこの国では必要なのか。王になつたら僕はこんな化け物達と生涯戦わないといけないのか。

王子様は自分の生まれを初めて呪いました。

今までずっと権力の座に執着していた王子様も、今まで知ることの無かつた王と言つ最高権力が払わなくてはいけない代価を田の当たりにして完全に萎縮してしまつています。まあ普通に考えて現在繰り広げられているような事態が日常茶飯事に起きてるような力オスな国は滅ぶべきなのですが、そう言つ一般常識的な事は王子様の脳内メモリーには無く、また在つたとしてもこのよつた終末的な光景を目にしてしまえば一気に吹つ飛んでしまつてゐるでしょうから仕方がないことかもしれません。

「さあ行きなさい、引換券だけは無事に確保するのよ！ 食べてはダメよ！」

「たたたたたたた、食べ？！」

無敵の軍隊を従えたアンデッドマスターを前に、王子様はもはや腰碎けです。その姿を見た魔女は一瞬にたりと口元を歪めました。しかしそれをすぐに消し、そしてそのままじくじく穏やかでやさしい、見るものすべてを安心させるような笑顔を携えて王子様の肩に手を遣りました。

「大丈夫です、王子様。わたしが、そんなことさせません。貴方にいたいたこの『アリス』の名に誓つて」

王子様はわずかな時間、息をすることを忘れました。その微笑をたたえた姿に、聖母の姿を垣間見たのです。

第十六話 「チャンスは逃さず見つけましょ」（後書き）

ちょっと短め、2000字弱です。
テンポよくやさしく読める感じでこれからもじっくり続きを読みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4157t/>

ふりむいて、王子様！

2011年11月24日19時56分発行